

# 帰属意識が主観的幸福感に及ぼす 影響構造に関する研究

北川 夏樹<sup>1</sup>・藤井 聡<sup>2</sup>

<sup>1</sup>正会員 東邦ガス株式会社 (〒456-8511 愛知県名古屋市中区桜田町19番18号)

E-mail:imagawaoban+kyo@gmail.com

<sup>2</sup>正会員 京都大学大学院工学研究科 都市社会工学専攻 (〒615-8540 京都府京都市西京区京都大学桂4)

E-mail:fujii@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

本研究は人の暮らしへの満足感を表す主観的幸福感(Subjective Well-Being)と、家族、地域、組織、国家の4種類の共同体への帰属意識との関連性について詳しい知見を得るべく、両者の間に位置する心理要素について探索的に検証した。その結果、帰属意識が当該共同体内の安心感や役割意識、他者からの情緒的な援助の享受等の要素を高め、主観的幸福感に正の影響を及ぼしている構造となっていることが示唆された。この結果は人々に共同体への深い帰属を促し、共同体でのコミュニケーションを誘発するような各種共同体施策の有用性を支持するものであると考えられる。

**Key Words** : 帰属意識, 国土計画, 地域計画

## 1. はじめに

### (1) 背景と先行研究

いうまでもなく、多くの人々にとって幸福の追求は最も重要なテーマの一つである。そして「築土構木」の故事に由来し、国民の生活を支援するために実施される土木施策もまた、人々の幸福な暮らしの実現を目的として講じられるべきである。実際、近年では人の幸福度を何らかの形で指標化し、GDPや費用便益比等のような国家政策の評価・判断指標として活用すべきとする主張もしばしば見られるようになってきている<sup>12)</sup>。

こうした背景とも関連する形で、近年の心理学の分野では、人の幸福を表す指標の一つとして主観的幸福感(Subjective Well-Being, c.f.Kahneman,1999<sup>3)</sup>, Oishi, et al 1999<sup>4)</sup>, Diener & Suh,1984<sup>5)</sup>)を用いた研究が行われてきている。主観的幸福感とは、暮らしに対する個人の満足感を反映する(Jakobsson, et al, 2009)<sup>6)</sup>概念、あるいは、生活全体の質に対する個人の主観的な評価(Diener, 1984<sup>7)</sup>; Kahneman & Kreuger, 2006<sup>8)</sup>)等と説明されており、多様な心理尺度を用いた測定が試みられてきている。

それと同時に、そうした主観的幸福感に影響を及ぼす「要因」についての研究も様々な進められている。中でも、家族や地域、組織等の共同体に対する帰属(belongingness)は人間の根源的な欲求であると見なされており、共同体へ帰属し、親密な人間関係を構築することが主観的幸福感を高める主要な要因の一つであると考

られてきている<sup>9,10)</sup>。例えば、既往研究では、夫婦<sup>11)</sup>や親子、地域住民<sup>12)</sup>といった様々な人間関係への満足感が主観的幸福感を高める可能性が示唆されている一方、身近な人との別れや、交友関係から排除されることは不安感や孤独感につながり<sup>13,14)</sup>、幸福感を低減する要因となりうることが知られている。

また、主観的幸福感とは日常的な活動の質に影響を受けることが知られているが<sup>15)</sup>、食事や移動を対象とした研究において、他者と一緒の活動は一人の場合よりもその満足感が高いことを示す結果が得られている<sup>16,17)</sup>ほか、共同体で活動する時間の長さが主観的幸福感に影響することも知られている<sup>18)</sup>。

このように、共同体に帰属し、その中で他者と何らかのつながりを持つことは、人間の幸福に少なからず影響を及ぼしているものと考えられる。しかし既往の研究では、様々な共同体への帰属と幸福感との関連性についての知見が蓄積されてきてはいるものの、家族や地域、国家などの共同体の違いによる幸福感への影響の相違に関しては十分な知見が蓄積されてはいない。これらに関する知見は、異なる性質の共同体に対して、それぞれに適した土木施策を個別に講じることの妥当性を支持するものになりうるであろうし、実際に共同体毎の施策を検討、立案する際に参照できる点が少なくないものと思われる。

以上のような現況の下、筆者らは「家族」（自分自身の家族）、「地域」（自分自身の居住する地域）、組織

(自分自身が属する, 職場, 学校等の組織), 「国家」(自分自身が属する国家, すなわち日本国家) の4つの共同体を対象とした意識調査<sup>19)</sup>を行い, 主観的幸福感の主要素である感情的幸福感(Affective SWB), 認知的幸福感(Cognitive SWB)と, 共同体への帰属が希薄な状態を表す「人間疎外尺度」との関連性について検証した。

その結果, 全ての共同体における疎外感が感情的幸福感と, 家族, 地域, 国家における疎外感が認知的幸福感とそれぞれ負の相関関係にある可能性が示された。また, 併せて行った重回帰分析では, 共同体の違いによる主観的幸福感への影響の仕方に相違が見られ, 共同体毎の性質の違いが主観的幸福感への影響力の相違を生み出している可能性が示唆されている。

## (2) 本研究の目的

この先行研究での調査では被験者の「帰属意識」と「主観的幸福感」を測定し, 両者の関連性について検証したが, 実際に帰属意識がどういった心理に働きかけ, 幸福感につながっているのか, その因果構造の詳細については調査, 分析がなされていない。また共同体の違いによって, そうしたメカニズムについても相違があるのかという点については, 既往の研究では着目されていない。しかしこれらに関する知見は, 人の幸福感を志向してより細やかな土木施策を講じる場合には重要な役割を担いうるものと期待される。例えば, 都市にかかわる土木計画を立案する際に, 住民の主観的幸福に資する様な地域共同体のあり方を想定するという視点の下, どのような整備と運用を図るべきかといった議論を図る際に, そうした主観的幸福感と共同体に関する知見が援用可能となる可能性が考えられる。また, 検討した土木施策を実施するためにはその対象となる住民への合意形成が不可欠である。共同体施策が人の幸福感を増進させる具体的なメカニズムを明らかにすることは, 国民や地域住民に施策の目的や見込まれる効果についての深い理解を促し, 施策への合意を得る際に重要な役割を果たしうると考えられる。

そこで本研究では帰属意識に規定され, 幸福感に影響を及ぼすような中間の心理要素について探索的な検証を加えることを目的とする。

## 2. 調査

### (1) 調査概要

2011年2月~3月に京都大学の学生93名を対象に紙面によるアンケート調査を実施した(男性50名, 女性43名, 平均年齢21.45歳, 年齢標準偏差2.745歳)。質問項目は「主観的幸福感(2種)」及び「共同体へ帰属意識(2種)」, そして主観的幸福感と帰属意識の中間に位置し

表1 感情的幸福感の質問項目

「日々の暮らし」の中で, 以下のような形容詞のペアに示す気分や感情を感じる頻度を, 5件法(0:全く感じなかった~4:とても頻繁に感じた)で尋ねた。

なお, 各形容詞のペアに対し, 4段階の感情水準を設定し(例:「うれしい-悲しい」の場合, とてもうれしい気持ち, 少しうれしい気持ち, 少し悲しい気持ち, とても悲しい気持ち), それぞれについて頻度を尋ねた。

#### 【水準因子】

うれしい-悲しい, 幸せな-不幸な, 快い-不快な

#### 【活性度因子】

積極的な-消極的な, 活発な-退屈な,  
ハッキリした感じ-「ねむたい」感じ

表2 感情的幸福感の算定式

(例)水準因子の算出

「うれしい-悲しい」, 「活発な-退屈な」, 「ハッキリした感じ-「ねむたい」感じ」の各形容詞ペアの得点を算出する。

「うれしい-悲しい」の場合

$3 \times$  (「とてもうれしい気持ち」を感じた頻度)

$+1 \times$  (「少しうれしい気持ち」を感じた頻度)

$+(-1) \times$  (「少し悲しい気持ち」を感じた頻度)

$+(-3) \times$  (「とても悲しい気持ち」を感じた頻度)

3つの形容詞ペア得点の加算平均を水準因子の尺度値とする。活性度因子についても同様。

ていると予測される心理要素である。以下, それぞれの概要とその測定尺度について説明する。

### (2) 主観的幸福感の測定尺度

先行研究<sup>19)</sup>と同様に, 感情的幸福感と認知的幸福感の二つの尺度を用いる。

#### a) 感情的幸福感

瞬間的な「良い感情」に起因する幸福感であり, 嬉しい, 快いといった感情からなる**水準因子**(valence)と, ワクワク感等の感情からなる**活性度因子**(activation)の二つで構成される(表1)。さらに表2で示す算定式により, 実際の尺度値を算出する。

#### b) 認知的幸福感

感情的幸福感が瞬間的な感覚であったのに対して, こちらは普段の暮らしやこれまでの人生を総合的に振り返った場合の満足感を表す。先行研究では感情的幸福感と認知的幸福感の間には正の相関関係があることが分かっている。測定には幸福感の国際比較研究でも用いられているSWLS尺度(表3)を用いる。

### (3) 共同体帰属意識の測定尺度

帰属意識の測定については, 先行研究に用いた人間疎外尺度に加え, 新たな尺度を設定して用いる。

#### a) 人間疎外尺度

人間疎外とは哲学者のヘーゲルが提唱した概念である。

表3 SWLS尺度の質問項目

「自分の暮らし」について、以下のような項目がどれくらい当てはまるのか、7件法（1:全く当てはまらない~7:良く当てはまる）で尋ねた。

- ・ほとんどの面で、「自分の暮らし」は理想に近い。
- ・「自分の暮らし」は、とてもすばらしい状態だ。
- ・私は「自分の暮らし」に満足している。
- ・私は今まで、「自分の暮らし」のために必要とされる重要な事柄を為し遂げてきた。
- ・私は、今の「自分の暮らし」の全てを組み替えることができるとしても、ほとんど何も変えないだろう。

曰く、人間の精神の成長過程においては「共同体と個人の意識とが一体化し、個人が共同体の成員となる」段階が存在する。これに至るにはまず、自己を共同体から疎遠化し、家族、国家等の共同体をその外部から認識する必要があり、そしてその後もう一度精神を共同体と一体化させることで、共同体への帰属意識を持つようになるという（cf. 渡邊, 2009<sup>20</sup>）。ただし、こうした過程を想定した時、一旦外化された精神が共同体と一体化せず、どの共同体へも属さないと言うケースが生ずることとなる。ヘーゲルはこのような状態を「疎外」と呼称し、この状態にある人間精神の成長は停滞したままになってしまふと論じている。渡邊ら<sup>20</sup>はこの「人間疎外」の状態についてヘーゲル自身が論述した同書の記述に基づいて、「家族」、「地域」、「組織」、「国家」の各共同体からの人間疎外尺度を構成している。本研究では、この尺度を援用することとし、その測定項目を表4に記す。

b) コミットメント尺度

組織コミットメントは経営行動科学研究や共同体研究において知見が重ねられている概念である。Porter et al(1974)<sup>21</sup>の定義(訳は高橋ら<sup>22</sup>を参照)によれば「ある特定の組織に対する個人の同一化(identification)および関与(involverment)の強さ」と捉えられ、企業における従業員の退職意思<sup>23</sup>や当該組織への貢献<sup>24</sup>等の要素と関連があることが報告されている。組織コミットメントの測定に関しても多種多様な尺度が考案され、それぞれの研究で知見が蓄積されているが、本研究では田尾<sup>25</sup>の研究の中から①愛着、②内在化、③規範的の三つの要素に着目し、既往研究を参考にしながら共同体毎に測定尺度を設定した(表5参照)。その一例として「家族コミットメント尺度」の質問項目を表6に記す。

(4) 中間心理要素として仮定する項目

共同体への帰属によって得られる肯定的な感情として、例えば集団に受け入れられていることの安心感や、共同体の一員として集団に貢献しようという使命感等が考えられるが、前者は水準要素、後者は活性度要素に関連する感情とも解釈できる。また冒頭では共同体からの排斥

表4 人間疎外尺度の質問項目

- ・自分と〇〇(共同体名)とは、一心同体だという感じがする。
- ・〇〇とは、家族の中の一人一人の人間関係の集合にしかすぎないと思う。
- ・私は〇〇をととても身近なものとして自然に感じる。
- ・自分が所属する〇〇に自らをなじませるのは当たり前だと思う。
- ・もしも自分一人の利益と〇〇の利益が対立したら、どちらを優先しますか。

表5 組織コミットメントの3要素

- ①愛着要素：当該集団が好き、集団にすることが楽しいといった感情に基づいたコミットメントで、共同体へ純粋に帰属したいから帰属している状態。
- ②内在化要素：組織のあり方や目標を自分の指針として、組織の利益のために尽くしたい、組織との一体感を感じている等の理由で帰属している状態。
- ③規範的要素：組織を離脱したり、他の組織に移ったりすることは道徳的に良くない、組織に恩義を感じているので所属するといった、道徳的観点から帰属している状態。

表6 家族コミットメントの質問項目

田中(1996)<sup>30</sup>の家族コミットメント尺度から、それぞれに該当し、本調査に合う項目を抽出。

(i)愛着要素

- ・自分の家庭の雰囲気が好きだ。
- ・家族のなかか心を開いて話し合える人がいる。
- ・家族と一緒に食事をしたり、話し合ったりするのは楽しい。

(ii)内在化要素

- ・家族の物の考え方・行動は理解できる。
- ・家族のためならたとえ自分が犠牲になっても仕方ない。
- ・家族が安心して暮らせるためには、努力を惜しまない。
- ・家族と私は運命共同体だ。

(iii)規範要素

- ・昔から続く家を受け継いで次代に渡すのは自分の務めだ。
- ・ほどほどの年齢になったら、家族を持つのは当然だ。
- ・家族を持っていないと、社会的に一人前でない。
- ・家族に流れる血のつながりを断ち切ることはできない。

が孤独につながることに触れたが、こうした孤独感もまた、主観的幸福感に影響を及ぼしうる感情の一つと考えられる。これらのことから、本研究ではこうした共同体内での安心感や使命感、あるいは共同体からの排斥による孤独感等の感情を、帰属が幸福感到に及ぼす影響を媒介(mediate)する「中間要素」として考慮することとした。以下に各項目の設定について説明する。

a) 共同体での安心感や使命感

中西(2000)<sup>26</sup>は共同体での居心地を表す「居場所感」概念の研究の中で、居場所感の下位にある構成尺度について検証している。因子分析の結果、共同体内での安らぎや、言動の自由感を表す「安心感」、自分が必要とされているという「役割感」、自分が理解されているという「受容感」の三つの因子が抽出されている。中西は「家庭」、「社会」の二種類について居場所感尺度を設

表7 家族内居場所感の質問項目

以下の感情を家族内でどの程度感じているか尋ねる。

- (i)安心感
  - ・安らぐ
  - ・落ち着く
  - ・のびのびできる
  - ・自由でいられる
  - ・くつろぐ
  - ・ありのままの気持ちが言える
  - ・幸せな気分になれる。
  - ・緊張する(逆転項目)
- (ii)役割感
  - ・自分が必要とされていると感じる。
  - ・自分が役に立っていると感じる。
  - ・私にしかできないことがある。
  - ・私がいないとみんながさびしがる
- (iii)受容感
  - ・私はいてもいなくても同じだと感じる。(逆転)
  - ・一人になりたくなる。(逆転)
  - ・私の気持ちは分かってもらえない。(逆転)
  - ・ありのままの自分が認められていると感じる。

表8 孤独感の質問項目

- (i)理解・共感の可能性
  - ・私の考えや感じを誰もわかってくれないと思う。(逆転項目)
  - ・私の生き方を誰もわかってくれはしないと思う。(逆転項目)
  - ・私の考えや感じを何人かの人はわかってくれると思う。
  - ・誰も私をわかってくれないと、私は感じている。(逆転項目)
  - ・私のことをまわりの人は理解してくれていると信じている。
  - ・私と全く同じ考えや感じをもっている人が、必ずどこかにいると思う。
  - ・私のことに親身に相談相手になってくれる人はいないと思う。
  - ・人間は、互いに相手の気持ちを分かりあえると思う。
- (ii)孤立感
  - ・結局、自分はひとりでしかないと思う。
  - ・人間は、本来、ひとりぼっちなのだと思う。
  - ・結局、人間はひとりで生きるように運命づけられていると思う。
  - ・どんなに親しい人も、結局、自分とは別個の人間であると思う。
  - ・他人の苦しみを分かち合おうと思っても、自分がその人にとって代わることはできない。
  - ・人間は、他人の喜びや悩みを一緒に味わうことができると思う。(逆転項目)
  - ・私がどんなに努力したところで、自分とは別の存在になることはできない。

定しており、本研究はこれらを用いて共同体毎の居場所感を測定する(なお、この尺度の中には、当該共同体の内外を比較することが前提となっているものが含まれている一方で、国家共同体に関しては、必ずしも国家外、すなわち海外を経験しているとは限らないため、測定することが不相当であると判断した)。使用した尺度の一例として家族内での居場所感について表7に示す。

b) 孤独感

孤独感を測定した研究として代表的なものとして、落合(1983)<sup>27)</sup>の尺度や UCLA-LS 尺度<sup>28)</sup>があるが、ここでは特に落合の尺度について紹介する。落合は、人間の孤独感は年を取るごとに多次元化していくとし、青年期における孤独感を記述するための尺度を作成した。落合によると、青年期の孤独感が「他者からの理解」と「共同体内での自分の個別性の自覚」の二つで構成されており、

表9 ソーシャル・サポート尺度の質問項目

<ソーシャル・サポート>

- (i)家族サポート
  - ・私の家族は本当に私を助けてくれる
  - ・必要などきに、家族は私の心の支えとなるよう手を差し伸べてくれる。
  - ・私は家族と自分の問題について話し合うことができる。
  - ・私の家族は私が何か決めるときに、喜んで助けてくれる。
- (ii)地域サポート
  - ・地域の人達は本当に私を助けてくれる。
  - ・必要などきに、地域の人達は私の心の支えとなるよう手を差し伸べてくれる。
  - ・私は地域の人達に自分の問題について相談することができる。
  - ・地域の人達は私が何か決めるときに、喜んで助けてくれる。
- (iii)組織サポート
  - ・組織の人達は本当に私を助けてくれる。
  - ・必要などきに、組織の人達は私の心の支えとなるよう手を差し伸べてくれる。
  - ・私は組織の人達に自分の問題について相談することができる。
  - ・組織の人達は私が何か決めるときに、喜んで助けてくれる。
- (iv)国家サポート
  - ・日本の政府は本当に私を助けてくれる。
  - ・国家は私達を手助けするに十分な保障やサービスを提供してくれている。
  - ・私は政府に自分の問題について助けを求めることができる。
  - ・日本の政府は私が何か決めるときに、喜んで助けてくれる。

表10 協同作業認識尺度の質問項目

- (i)協同効用因子
  - ・たくさんの仕事でも、みんなと一緒にやれば出来る気がする。
  - ・協同することで、優秀な人はより優秀な成績を得ることができる。
  - ・みんなで色々な意見を出し合うことは有益である。
  - ・個性は多様な人間関係の中で磨かれていく。
  - ・グループ活動ならば、他の人の意見を聞くことができるので自分の知識も増える。
  - ・協同はチームメイトへの信頼が基本だ。
  - ・一人でやるよりも協同した方が良い結果を得られる。
  - ・グループのために自分の力(才能や技能)を使うのは楽しい。
  - ・能力が高くない人たちでも団結すれば良い結果を出せる。
- (ii)個人志向因子
  - ・周りに気遣いしながらやるより一人でやる方が、やり甲斐がある。
  - ・みんなと一緒に作業すると、自分の思うようにできない。
  - ・失敗した時に連帯責任を問われるくらいなら、一人でやる方がよい。
  - ・人に指図されて仕事はしたくない。
  - ・みんなで話し合っていると時間がかかる。
  - ・グループでやると必ず手抜きをする人がいる。

特に「他者からの理解」尺度に関しては UCLA-LS 尺度の得点とも有意な相関が見られ、その関連性が示唆されている。小林(2007)<sup>29)</sup>では落合の項目をベースに因子分析を行い、「理解・共感の可能性」、「孤立感」、「自分の個別性の自覚」の自覚の三つの尺度を構成している。本研究では、落合、UCLA の両方に共通している「他者理解」に着目し、小林の研究で「他者理解」と強い負の相関が見られた「孤立感」尺度とともにその程度を測定し、帰属意識ならびに主観的幸福感との関係について検証することとする。実際に使用する尺度については表8に示す。

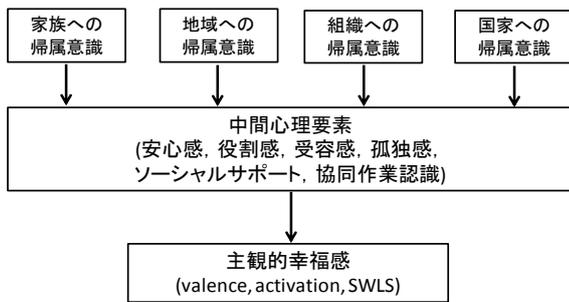


図1 想定する因果構造

c) ソーシャル・サポート尺度

ソーシャルサポートとは、共同体内他者から受ける援助のことで、物品のやりとりのような物質的サポートだけでなく、悩みの相談に乗るといった精神的サポートも含まれる。既往研究ではこうしたサポートと幸福感に強い相関がある<sup>30)</sup>ことが示唆されているため、本研究でもソーシャルサポートを中間心理要素として仮定することとした。実際の測定では、岩佐ら<sup>31)</sup>の尺度を参照した。

d) 協同作業に対する認識

共同体内での活動が幸福感に影響する可能性については、冒頭で述べた。ここでは共同体への帰属が共同体内の活動への満足感を高め、ひいては主観的幸福感に影響するのではと考え、共同体内活動に対する認識尺度を中間心理要素として仮定する。

調査では長濱ら<sup>32)</sup>の協同作業認識尺度の中から、集団内でのディスカッション能力と相関があり、帰属意識とも関連があることが推測される「協同効用」、「個人志向」の二つの因子に着目し、測定を行う。測定には表10のような質問項目を用いた。

3. 調査結果

(1) 相関分析

図1に示した因果構造に対応する各尺度間の相関分析結果を表11~21に記す。

a) 帰属意識と主観的幸福感との相関分析(表11)

帰属についての緒変数は、「国家」に関するものを除いていずれも水準因子と事前想定通りの方向で有意に相関していることが示された。ただし、活性化因子については組織人間疎外と有意に相関している以外は、帰属についての緒変数と有意な相関が検出されず、認知的幸福感については地域コミットメントと有意に相関している以外は、同じく有意な相関が見いだせなかった。ただし、有意な水準に届いていない相関係数についても、家族、地域、組織共同体の3つについては、人間疎外尺度が活性化因子と認知的幸福感と負の相関を持ち、コミットメント尺度がそれらと正の相関を持っているという結果と

なった。については、十分な数のサンプルを対象とした調査では、帰属意識がこれらに想定通りの方向での影響を及ぼす可能性は考えられる。

b) 帰属意識、中間心理要素、主観的幸福感の相関分析

(表12~21)

共同体によって多少の違いはあるものの、基本的にはそれぞれの共同体への帰属意識が強いほど居場所感やサポート、「協同作業は価値がある」と考える協同効用傾向が高まり、反対に孤立感や個人志向の尺度値が低減し、それらを通して、それぞれの項目の主観的幸福感が高くなる可能性が示唆された。

表11 帰属意識と主観的幸福感との相関分析

(n=92)	水準因子 (valence)	活性化因子 (activation)	認知的幸福感 (SWLS)
家族人間疎外	-0.203(*)	-0.023	-0.125
地域人間疎外	-0.175(*)	-0.081	-0.093
組織人間疎外	-0.280(***)	-0.245(**)	-0.090
国家人間疎外	0.047	0.012	0.035
家族コミット	0.226(**)	0.104	0.151
地域コミット	0.219(**)	0.164	0.178(*)
組織コミット	0.231(**)	0.168	0.079
国家コミット	0.041	0.068	0.070

※数字は相関係数。\*\*\*:p<0.01, \*\*:p<0.05, \*:p<0.1

表12 主観的幸福感同士の相関分析

(n=92)	水準因子 (valence)	活性化因子 (activation)	認知的幸福感 (SWLS)
水準因子	1	0.611(***)	0.355(***)
活性化因子	0.611(***)	1	0.316(***)
認知的幸福感	0.355(***)	0.316(***)	1

※数字は相関係数。\*\*\*:p<0.01, \*\*:p<0.05, \*:p<0.1

表13 相関分析結果(家族)(中間要素と帰属意識)

(n=92)	家族人間疎外	家族コミットメント
家族安心感	-0.691(***)	0.713(***)
家族役割感	-0.546(***)	0.575(***)
家族受容感	-0.583(***)	0.614(***)
家族サポート	-0.660(***)	0.668(***)
理解・共感	-0.102	0.148
孤立感	0.291(***)	-0.272(***)
協同効用	-0.215(**)	0.165
個人志向	0.214(**)	-0.145

※数字は相関係数。\*\*\*:p<0.01, \*\*:p<0.05, \*:p<0.1

表14 相関分析結果(家族)(中間要素と主観的幸福感)

(n=92)	水準因子 (valence)	活性化因子 (activation)	認知的幸福感 (SWLS)
家族安心感	0.386(***)	0.118	0.301(***)
家族役割感	0.308(***)	0.328(***)	0.316(***)
家族受容感	0.442(***)	0.112	0.364(***)
家族サポート	0.418(***)	0.169	0.411(***)

※数字は相関係数。\*\*\*:p<0.01, \*\*:p<0.05, \*:p<0.1

表 15 相関分析結果(地域)(中間要素と帰属意識)

(n=92)	地域人間疎外	地域コミットメント
地域安心感	-0.620(***)	0.734(***)
地域役割感	-0.569(***)	0.665(***)
地域受容感	-0.379(***)	0.448(***)
地域サポート	-0.630(***)	0.630(***)
理解・共感	-0.228(***)	0.246(**)
孤立感	0.193(*)	-0.133
協同効用	-0.391(***)	0.377(***)
個人志向	0.343(***)	-0.275(***)

※数字は相関係数。\*\*\*:p<0.01,\*\*:p<0.05,\*:p<0.1

表 16 相関分析結果(地域)(中間要素と主観的幸福感)

(n=92)	水準因子 (valence)	活性化因子 (activation)	認知的幸福感 (SWLS)
地域安心感	0.299(***)	0.248(**)	0.286(***)
地域役割感	0.185(*)	0.230(**)	0.126
地域受容感	0.112	0.077	0.246(**)
地域サポート	0.196(*)	0.232(**)	0.127

※数字は相関係数。\*\*\*:p<0.01,\*\*:p<0.05,\*:p<0.1

表 17 相関分析結果(組織)(中間要素と帰属意識)

(n=92)	組織人間疎外	組織コミットメント
組織安心感	-0.601(***)	0.649(***)
組織役割感	-0.544(***)	0.512(***)
組織受容感	-0.480(***)	0.450(***)
組織サポート	-0.514(***)	0.560(***)
理解・共感	-0.283(***)	0.180(*)
孤立感	0.180(*)	-0.170
協同効用	-0.367(***)	0.312(***)
個人志向	0.235(**)	-0.102

※数字は相関係数。\*\*\*:p<0.01,\*\*:p<0.05,\*:p<0.1

表 18 相関分析結果(組織)(中間要素と主観的幸福感)

(n=92)	水準因子 (valence)	活性化因子 (activation)	認知的幸福感 (SWLS)
組織安心感	0.368(***)	0.234(**)	0.164
組織役割感	0.203(*)	0.347(***)	0.202(*)
組織受容感	0.247(**)	0.249(**)	0.204(*)
組織サポート	0.220(**)	0.186(*)	0.117

※数字は相関係数。\*\*\*:p<0.01,\*\*:p<0.05,\*:p<0.1

表 19 相関分析結果(国家)(中間要素と帰属意識)

(n=92)	国家人間疎外	国家コミットメント
国家サポート	-0.660(***)	0.668(***)
理解・共感	0.078	0.019
孤立感	-0.064	0.030
協同効用	-0.163	0.239(**)
個人志向	0.276(***)	-0.111

※数字は相関係数。\*\*\*:p<0.01,\*\*:p<0.05,\*:p<0.1

表 20 相関分析結果(国家)(中間要素と主観的幸福感)

(n=92)	水準因子 (valence)	活性化因子 (activation)	認知的幸福感 (SWLS)
国家サポート	-0.006	0.113	0.046

※数字は相関係数。\*\*\*:p<0.01,\*\*:p<0.05,\*:p<0.1

表 21 孤独感, 協同作業認識と幸福感の相関分析

(n=92)	水準因子 (valence)	活性化因子 (activation)	認知的幸福感 (SWLS)
理解・共感	0.433(***)	0.250(**)	0.120
孤立感	-0.200(**)	-0.195(*)	-0.066
協同効用	0.356(***)	0.152	0.251(**)
個人志向	-0.044	0.163	-0.035

※数字は相関係数。\*\*\*:p<0.01,\*\*:p<0.05,\*:p<0.1

## (2) 共分散構造分析

先に示した相関分析は、それぞれの中間要素が、各共同体への共同体意識が各々の主観的幸福感に及ぼしている影響を「媒介」(mediate)している可能性を示すものであるが、それらの媒介変数の中でもとりわけ強い影響を持つ中間変数を見いだすことを目的として、図1で指定した因果構造モデルを対象に共分散構造分析を行った。共分散構造分析では、それぞれの内生変数に対して複数の説明変数を想定し、それらを比較する事を通して、それらの中でもとりわけ直接的に強い影響を及ぼしている変数を抽出することが可能となる。

については以下、共分散構造分析で有意な結果が得られた因果パスを図2~6に記す。なお、検定にあたっては、以上に述べた相関係数の符号を想定した片側検定を行った。また、ここでは見やすくするための便宜上、図2~6にて分類して因果パスを図示するが、これらはいずれも単一の構造にて推定されたものと了解されたい。また、構造の仮定においては、先に指摘したように図1の因果構造を想定すると共に、ヘーゲルの人間疎外概念の理論を踏まえた上で「人間疎外をコミットメント尺度の背後に存在する」という構造を仮定した上で分析を行った。全体の適合度については図6に示したように、良好な水準となった。

分析の結果、次のような因果構造が示唆された。

- 1) 全ての共同体で、人間疎外尺度が高まると、コミットメントが低下する。
- 2) 家族コミットメントが高いと、家族受容感が高まり、水準因子が増進する。
- 3) 家族コミットメントが高いと、家族役割感が高まり、活性化因子が高揚する。
- 4) 家族コミットメントが高いと家族サポートが高く、その結果、認知的幸福感が高揚する。
- 5) 地域コミットメントが高いと地域受容感、地域安心感、地域サポートが高まり、その結果、認知的幸福感が高揚する。
- 6) 組織コミットメントが高いと組織安心感が高まり、水準因子が増進する。
- 7) 地域や組織に対するコミットメントが高いと「理解・共感」が向上し(すなわち、誰かに理解されている、

誰かと共感できるという認識が上昇し、水準因子が向上する。

8) 地域や組織、国家に対するコミットメントが高いと「協同効用因子」の値が高まり(すなわち、共同体での協同作業は有意義だとの認識が上昇し)、水準因子が向上する。

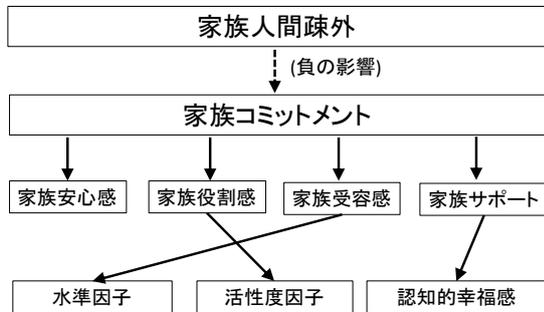


図2 共分散構造分析結果-1

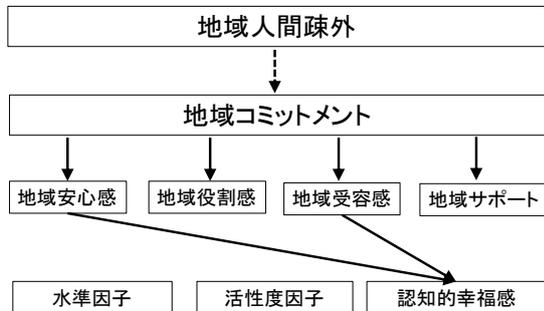


図3 共分散構造分析結果-2

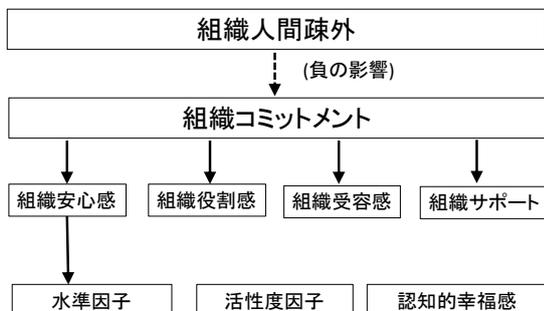


図4 共分散構造分析結果-3

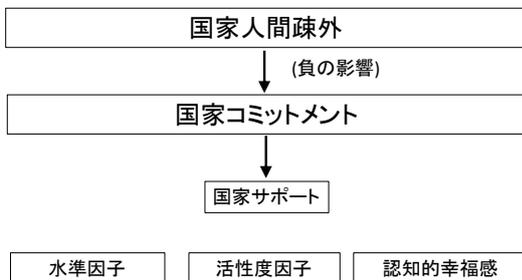
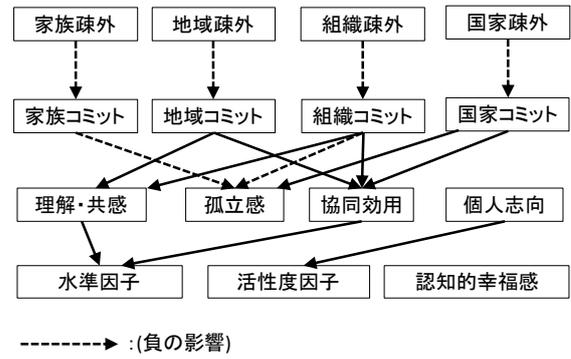


図5 共分散構造分析結果-4



n=92,  $\chi^2=314.705$ ,  $\chi^2/df=1.290$ , CFI=0.951, RMSEA=0.056

図6 共分散構造分析結果-5

#### 4. 総合考察

##### (1) 実証的知見について

本研究の分析結果より、家族と地域への共同体意識が強い個人ほど「認知的幸福感」をより強く感じているということが示された。そしてそうした傾向が見られるのは、家族への共同体意識が高い個人ほど家族からのサポートが受けられる傾向が強い、ということが原因であると共に、自分自身の地域への共同体意識が高い個人ほどその地域に「受け入れられている」という感じがあり、その地域にいて「安心感」を感じることができる、ということが原因であるということが示された。

また、感情的幸福感における水準因子(うれしく快く幸せと感じる主観的幸福感)、活性度因子(積極的でハッキリとした幸福感)についてもまた、家族への共同体意識が強い個人ほど高い水準となる傾向が示された。そしてその理由は、家族への共同体意識が高い個人の方が、家族からの受容感を持っており、また家族の中で何らかの「役割感」を持っている傾向が強いからであるということが示された。同様に水準因子には組織共同体内で享受する安心感にも影響を受けることが示唆された。

さらには、誰かから「理解されている」「共感されている」と感じていたり、他者との協同が有意義と感じている人々は、主観的幸福感における水準因子が高く、かつ、そう感じるのは組織や地域、国家への共同体意識が高い人々であるということも示された。

この様に、本研究では、自身の「家族」、自身が居住する「地域」、自身が属する職場・学校等の「組織」、もっとも大きな共同体の一つである「国家」への共同体意識が高い人々は、より高い主観的幸福感を持っている事が示された。そして共同体意識がそのような影響を持っているのは、「家族」に関してはサポートが得られたり自らの役割感を持つ

ことができる事が理由であり、「地域」に関しては、自身の地域にて安心感と受容感、サポートが得られる事、そして、誰かから理解・共感が得られることと協同作業が有意義との感じられる事が理由であった。そして「組織」についてもまた、組織内での安心感や誰かから理解・共感が得られるとの感覚、協同作業への有意義さを持つことができる事が理由であり、国家においては協同作業への有意義の知覚という事が示された。

## (2) 政策的意義について

今日の土木政策では、地域コミュニティの再生や創出が政策目的に据えられることがしばしばである。例えば、国土交通省の総合政策局では、地域コミュニティ再生の支援を図っている<sup>33)</sup>。そしてそうした流れの中で全国で地域コミュニティ施策が展開されている。例えば、鹿児島県土木部の23年度事業概要書<sup>34)</sup>によれば同部の主要施策の一つとして「共生・協同型地域コミュニティの再生・創出」があり、地域住民による道路や砂防等の清掃ボランティアの支援に予算が割かれている。本研究の知見に基づけば、そうした支援事業は、「地域」への共同体意識を高め、当該個人の主観的幸福感の増進に寄与する可能性が示唆される。さらに、そうした支援によって、当該地域コミュニティにおける受容感や安心感を高めることができるとすると、より直接的に「認知的」な幸福感が増進するものと考えられる。また、本研究の分析より、「感情的」な幸福感の増進においては、他者から理解されている感覚、共感を得ることが出来る感覚の重要性が示された。そしてその感覚の醸成に於いて、地域コミュニティに対する共同体意識が重要な役割を担っていることも示された。このことは、地域コミュニティの凝集性を高め、活性化を図る施策は、人々の認知的な幸福感のみならず、感情的な幸福感の増進にも寄与する可能性を示している。

なお、本研究で行った検証は未だ探索的なものに留まっていることも事実であり、より多くの中間心理要素を仮定した調査を行う必要があるだろう。さらに今回の結果は、本研究のサンプルが学生であったということもあり、より広範なサンプルを用いた上で知見を蓄積することが必要である。

付録：共分散分析の数値計算結果

注：\*\*\*は  $p < .001$

		標準化 係数	有意 確率
家族コミット	← 家族人間疎外	-0.795	***
地域コミット	← 地域人間疎外	-0.787	***
組織コミット	← 組織人間疎外	-0.754	***

		標準化 係数	有意 確率
国家コミット	← 国家人間疎外	-0.63	***
家族役割感	← 家族コミット	0.489	***
家族安心感	← 家族コミット	0.705	***
家族受容感	← 家族コミット	0.609	***
家族サポート	← 家族コミット	0.66	***
協同効用	← 家族コミット	0.004	0.483
個人志向	← 家族コミット	-0.118	0.112
孤立感	← 家族コミット	-0.243	0.002
理解・共感	← 家族コミット	0.076	0.184
地域役割感	← 地域コミット	0.67	***
地域安心感	← 地域コミット	0.697	***
地域受容感	← 地域コミット	0.479	***
地域サポート	← 地域コミット	0.649	***
協同効用	← 地域コミット	0.265	0.002
個人志向	← 地域コミット	-0.159	0.050
理解・共感	← 地域コミット	0.189	0.018
孤立感	← 地域コミット	-0.064	0.237
組織役割感	← 組織コミット	0.439	***
組織安心感	← 組織コミット	0.65	***
組織受容感	← 組織コミット	0.504	***
組織サポート	← 組織コミット	0.559	***
協同効用	← 組織コミット	0.235	0.007
個人志向	← 組織コミット	-0.082	0.206
理解・共感	← 組織コミット	0.205	0.012
孤立感	← 組織コミット	-0.236	0.003
国家サポート	← 国家コミット	0.48	***
孤立感	← 国家コミット	0.187	0.024
協同効用	← 国家コミット	0.13	0.076
個人志向	← 国家コミット	0.012	0.454
理解・共感	← 国家コミット	-0.017	0.418
水準因子	← 家族役割感	-0.043	0.645
活性化因子	← 家族役割感	0.209	0.042
水準因子	← 家族安心感	0.058	0.353
活性化因子	← 家族安心感	-0.02	0.55
認知的幸福感	← 家族安心感	-0.124	0.781
水準因子	← 家族受容感	0.229	0.069
活性化因子	← 家族受容感	-0.15	0.824
認知的幸福感	← 家族受容感	0.141	0.188
水準因子	← 家族サポート	0.085	0.289
活性化因子	← 家族サポート	0.069	0.333
認知的幸福感	← 家族サポート	0.338	0.016
水準因子	← 地域役割感	0.049	0.356
認知的幸福感	← 地域役割感	-0.086	0.732
水準因子	← 地域安心感	0.139	0.126
活性化因子	← 地域安心感	-0.001	0.503
認知的幸福感	← 地域安心感	0.234	0.031
水準因子	← 地域受容感	-0.178	0.936
活性化因子	← 地域受容感	-0.08	0.257
認知的幸福感	← 地域受容感	0.229	0.03
水準因子	← 地域サポート	0.029	0.419
活性化因子	← 地域サポート	0.205	0.082

		標準化 係数	有意 確率
認知的幸福感	<— 地域サポート	-0.12	0.795
水準因子	<— 組織役割感	-0.003	0.509
活性化因子	<— 組織役割感	0.148	0.116
認知的幸福感	<— 組織役割感	0.151	0.108
活性化因子	<— 組織安心感	0.008	0.477
認知的幸福感	<— 組織安心感	0.018	0.451
水準因子	<— 組織受容感	0.091	0.256
活性化因子	<— 組織受容感	0.132	0.181
認知的幸福感	<— 組織受容感	0.173	0.113
水準因子	<— 組織サポート	-0.197	0.942
活性化因子	<— 組織サポート	-0.099	0.775
認知的幸福感	<— 組織サポート	-0.154	0.883
水準因子	<— 国家サポート	-0.093	0.832
活性化因子	<— 国家サポート	0.024	0.405
認知的幸福感	<— 国家サポート	-0.026	0.601
水準因子	<— 協同効用	0.158	0.076
活性化因子	<— 協同効用	0.092	0.213
認知的幸福感	<— 協同効用	0.135	0.118
水準因子	<— 個人志向	0.087	0.2
活性化因子	<— 個人志向	0.286	0.004
認知的幸福感	<— 個人志向	0.001	0.495
水準因子	<— 理解・共感	0.222	0.027
活性化因子	<— 理解・共感	0.096	0.211
認知的幸福感	<— 理解・共感	-0.21	0.962
水準因子	<— 孤立感	-0.028	0.392
活性化因子	<— 孤立感	-0.119	0.133
認知的幸福感	<— 孤立感	0.078	0.768
認知的幸福感	<— 家族役割感	0.054	0.325
水準因子	<— 組織安心感	0.219	0.058
活性化因子	<— 地域役割感	0.057	0.342

#### 参考文献

- 1) Diener(2006).Guidelines for National Indicators of Subjective Well-Being and Ill-Being. *Applied Research in Quality of Life*, 151-157
- 2) クリストファー・ディッキー, GDP に代わる「幸福度」という指標, ニュースウィーク日本語版 2010年9月1日号, 阪急コミュニケーションズ
- 3) Kahneman, D.(1999). Objective happiness. In Kahneman, D., Diener, E., & Schwarz, N (Eds.), *Well-Being: The foundations of hedonic psychology*(pp. 3-25). New York: Russell Sage Foundation.
- 4) Oishi, S., Diener, E., Suh, E., Lucas, RE.(1999). Value as a Moderator in Subjective Well-Being. *Journal of Personality* 67
- 5) Diener, E., (1984). Subjective well-being. *Psychological Bulletin*, 95, 542-575.
- 6) Jakoosson Bergsted, C., Gamble, A., Gärling, T., Hagman, O., Polk, M., & Ollsen, L. E.(2009b). *Subjective well-being related to satisfaction with daily travel*. Unpublished manuscript.
- 7) Diener, E., (1984). Subjective well-being. *Psychological Bulletin*, 95, 542-575.
- 8) Kahneman, D., & Krueger, A.B.(2006).Developments in the measure-

ment of subjective well-being. *Journal of Economic Perspectives*, 20, 3-24.

- 9) Baumeister, R. F. and Leary, M. R.: The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation, *Psychological Bulletin*, Vol.117, No.3, pp.497-529, 1995.
- 10) Myers, D. G.: Close relationships and quality of life, In Kahneman, D., Diener, E. and Schwarz, N.(Eds.): *Well-being: The Foundations of Hedonic Psychology*, New York: Russell-Sage, pp.374-391, 1999.
- 11) Inglehart, R. (1990) Culture shift in advanced industrial society. Princeton, N.J.: Princeton University Press.
- 12) 石川 周子 (2005) 地域における交流と子どもの生活満足感, 日本家政学会誌 Vol.56 No.8 521-531
- 13) Diener, M. L. and McGavran, M. B.(2008) What makes people happy? A developmental approach to the literature on family relationships and well-being. In R. Larsen and M. Eid (Eds.): *The Science of Subjective Well-Being*. New York, NY: Guilford Press.
- 14) Barden, R. C., Garber, J., Leiman, B., Ford, M. E., and Masters, J. C.(1985). Factors governing the effective remediation of negative affect and its cognitive and behavioral consequences. *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol.49, pp.1040-1053.
- 15) Lyubomirsky, S., Sheldon, KM., Schkade, D.(2005).Persuing Happiness: The Architecture of Sustainable Change. *Review of General Psychology*, Vol. 9, 111-131
- 16) Danis, MA (1985) : Living arrangement and dietary patterns of old adults in the United States. *Journal of Gerontology*, 40, No.4. 434-442
- 17) 北川夏樹(2011), 日常的な移動が主観的幸福感に及ぼす影響に関する研究, 土木学会論文集 D3(土木計画学), 67(5)(土木計画学研究・論文集第 28 巻), 1\_697-1\_703
- 18) Diener, E., & Seligman, M. E. P. (2002). Very happy people. *Psychological Science*, 13, 81-84
- 19) 北川夏樹(2011), 共同体からの疎外意識が主観的幸福感に及ぼす影響に関する研究, 土木学会論文集 D3(土木計画学), 67(5)(土木計画学研究・論文集第 28 巻), 1327-1332
- 20) 渡邊望, 羽鳥剛史, 藤井聡, 竹村和久 : 近代大衆社会における人間疎外と大衆性についての実証的研究, 土木計画学研究・講演集, Vol.40, 2009.
- 21) Porter, L.W., Steers, R. M., Mowday, R. T., & Boulian, P. V. (1974). Organizational commitment, job satisfaction, and turnover among psychiatric technicians. *Journal of Applied Psychology*, 59, 603-609
- 22) 高橋弘司, 渡辺直登, 野口裕之, John P Meyer(1998), 3次元組織コミットメント尺度日本語版の翻訳等価性の検討: 日本-カナダ比較, 経営行動科学学会年次大会発表論文集(1), 159-169
- 23) 青木恵之祐(2001), 従業員の心理的契約と組織コミットメントが退職意思に及ぼす影響について, 産業・組織心理学研究 15(1), 13-25
- 24) 板倉宏昭(1999), 3次元組織コミットメントと組織貢献度, *Journal of Japan for Management System Vol.16 No.1*, 7-12
- 25) 田尾雅夫(1997), 「会社人間」の研究: 組織コミットメントの理論と実際, 京都大学学術出版会
- 26) 中西友美(2000), 若い世代の母親の居場所感についての基

- 礎的研究, 臨床教育心理学研究 Vol.26 No.1, 87-96
- 27) 落合良行(1983), 孤独感の類型判別尺度(LSO)の作成, 教育心理学研究, 31(4), 60-64
- 28) Russell, D., Peplau, L. A. & Cutrona, C. E.(1980), The revised UCLA Loneliness Scale, *Journal of Personality and social psychol.* 39, 3, 472-480
- 29) 小林邦雄(2007), 大学生の「孤独感」と「アイデンティティ」の研究: 映画鑑賞と関連づけて, *Memoirs of the School of Biology-Oriented Science and Technology of Kinki University*19, 81-100
- 30) Astrom, D. R. (1984). *The consequences of being single*. New York: Peter Lang.
- 31) 岩佐一, 権藤恭之, 増井幸恵, 稲垣宏樹, 河合千恵子, 大塚理加, 小川まどか, 高山緑, 藺牟田洋美, 鈴木隆雄 (2007), 日本語版「ソーシャル・サポート尺度」の信頼性ならびに妥当性—中高年者を対象とした検討—, 厚生指標 54(6), 26-33
- 32) 長濱文与, 安永悟, 関田一彦, 甲原定房(2009), 協同作業認識尺度の開発, 教育心理学研究, 57, 24-37
- 33) 地域コミュニティづくり研究会 (著), 国土交通省総合政策局事業総括調整官室 (監修) : 自立型地域コミュニティへの道—人口減少に負けない豊かで元気な地域をつくる, ぎょうせい, 2004.
- 34) 鹿児島県土木部 平成23年度土木部事業概要

?

## The influence structure of subjective well-being by belonging to community

Natsuki KITAGAWA, Satoshi FUJII

This study searched the psychology of the intermediate elements of belonging to community and Subjective Well-Being, which express the satisfaction to the lives of everyday, to clarify the relationship between the two detailed. As a result, We find that there are a sense of security, role, getting the emotional support in the community, and so on, as an intermediate element. This finding is expected to support the usefulness of some policies which make people belong to community (family, region, other organizations, and nation) and communicate with people in them.